

紀南地域の概要について

1. 位置と自然条件

(1) 位置とアクセス

① 位置

本地域は、紀伊半島の東部、三重県の最南端に位置し、東部は熊野灘に面し、西部は紀伊山地を境に奈良県、熊野川を境に和歌山県、奈良県と接している。総面積は、約541Km²で、県土の9.4%を占めているが、人口は43,779人（平成17年国調速報）と、三重県総人口の2.3%となっている。

また、熊野市、御浜町、紀宝町、紀和町、鵜殿村の1市3町1村で構成されていたが、平成17年11月1日に熊野市と紀和町が合併し、平成18年1月10日に紀宝町と鵜殿村が合併したことにより、平成18年1月10日以降は、熊野市、御浜町、紀宝町の1市2町の構成となった。

② 交通アクセス

ア) 道路

本地域の幹線道路には、中部圏、近畿圏を結ぶ主要道路であり、域内を縦断する国道42号、奈良県、大阪府と結ぶ国道169号、域内沿岸から和歌山県へ続く国道311号などがある。しかし、山間部、海岸部を走るため、幅員が狭くカーブが多く、大雨の時には矢ノ川峠などで雨による交通規制が行われることがある。

また、高速道路については近畿自動車道紀勢線（近畿自動車道）が、勢和多気ICから大宮大台IC、紀勢IC、紀伊長島ICまで有料方式で中日本高速道路株式会社により整備されることになっている。その内、勢和多気ICから大宮大台ICまでは、平成18年3月11日に開通予定であり、先の紀勢ICまでは平成20年頃のに開通を目指している。

その先の紀伊長島ICから尾鷲北ICまでは、新直轄方式で国土交通省が整備することになっているが開通予定は未定である。

さらに、その先の熊野市までは、一般国道42号バイパスの熊野尾鷲道路として尾鷲市（尾鷲南IC）から熊野市（大泊IC）まで国土交通省が整備することとなっている。

その内、尾鷲市内の尾鷲南ICから三木里ICまでは、平成19年度末に開通予定であるが、熊野市内については開通予定は未定である。

現在、自動車で名古屋から熊野市までの所要時間は名古屋西ICから勢和多気ICまで約100キロで1時間15分、勢和多気ICから熊野市までは、国

道42号で約100キロで約2時間を要する。

また、大阪（梅田）からは阪神高速、近畿自動車道葛城ICから国道169号を利用し、約170kmで3時間程度を要する。

イ) 鉄道・バス

鉄道については、JR紀勢本線が本地域への唯一のアクセスとなっているが、運行本数は、平成17年12月現在で1日30本程度である。

本地域と名古屋間のアクセスについてみると、JR名古屋～紀伊勝浦間に「ワイドビュー南紀」が運行しており、所要時間は名古屋駅から熊野市駅まで2時間50分（直通）であるが、1日の運行は、上り下り各6本（平日は各4本）である。

一方、本地域と大阪間のアクセスについては、直通列車の運行が行われていないことから、最短でも大阪難波駅から熊野市駅まで、私鉄（近鉄）からJRへ乗り継いで、3時間30分の時間を要する。

本地域と域外を結ぶバス輸送については、東京から和歌山県勝浦間を夜行バス（所要10時間）が、名古屋市から熊野市間を定期高速バス（熊野古道シャトルバス（所要4時間））がそれぞれ1往復／1日している。

また、本地域と三重県の津市、松阪市を結ぶ特急バスについては、1日2～3往復している。

(2) 地形・地勢条件

① 地形・地勢条件

本地域は、1000m級の大台山系、紀伊山脈を背景とする急峻な山々が、海岸線までせまり、平坦部分が少なくなっている。

また、海岸線については、熊野市の北部は複雑に入り組んだリアス式海岸であるが、熊野市南部（鬼ヶ城）から紀宝町までは、七里御浜（しちりみはま）と呼ばれ、20数Kmに及ぶなだらかな海岸線（砂利浜）が形成されている。

② 土地利用

本地域は、その面積の大部分が山林部であり、82.5%を占めている。三重県の土地利用状況と比較すると、「山林」の割合がかなり高く、「宅地」「田」「畑」などの占める割合が低くなっているのが特徴である。特に、宅地は、三重県全体の5.5%に対し、本地域では1.3%と少ないため、全体的に地価が高く、三重県の平均地価を上回っている。

③ 国立公園の指定

本地域は、吉野熊野国立公園の一角を占めており、熊野市から和歌山県新宮市にかけての県境部一帯が国立公園区域となっており、熊野市の鬼ヶ城、海岸部の七里御浜、旧紀和町の瀨峡など、恵まれた海と山の自然景観を有している。

(3) 自然条件

① 気象条件

本地域の気候は、温暖多雨の南海気候区に属している。熊野市（新鹿）と津市の気温を比較すると、熊野市（新鹿）の気温は、夏涼しく冬温暖であり、寒暖の差の少ない安定した気候を有している。

また、本地域は全国でも有数の多雨地帯であるが、降雨量は一時期に集中しており、雨量の割に降雨日数が少なくなっている。熊野市（新鹿）の場合、梅雨の時期から台風の時期（6月～9月）に降水量が集中する。津市との降水量を比較すると、年計で約1.8倍になる。

この温暖多雨の気候が檜や杉などの良材を生み出す要因の一つとなっている。

図表 平成15年度 気象比較

	平均気温（℃）			平均（月）降雨量（mm）
	8月	1月	年平均	年平均
熊野市（新鹿）	26.2	6.0	16.5	260.5
津市	27.0	4.5	15.9	146.8

出所) 津気象台「気象月報」

(4) 歴史

本地域は、日本最古の書物である「古事記」「日本書紀」にも著されている行事、神話、習俗などが数多く残されており、「神武東征」や「徐福渡来」あるいは「坂上田村麻呂の鬼退治」などもこの地が舞台であったと言い伝えられているほか、日本最古の社である「花の窟」も古くからの神事を今もそのまま伝承している。

また、本地域は、平安時代から江戸時代にかけて、伊勢から熊野三山への主要参詣路であった熊野街道が今も随所にその面影を残しており、「蟻の熊野詣」と形容されたほど多くの参詣者を集めた往事を偲ぶことのできる貴重な歴史的遺産となっている。

なお、これらの伊勢から熊野三山にいたる熊野街道（熊野古道伊勢路）を

含む、和歌山県・奈良県・三重県のエリアは、平成16年7月「紀伊山地の霊場と参詣道」として、世界文化遺産に登録されている。

2. 人口

(1) 人口の推移

本地域の総人口は、43,779人（平成17年国調速報）であり、三重県総人口の2.3%にあたる。

昭和35年～平成17年の45年間における人口推移をみると、三重県では25.7%増加しているのに対し、本地域では全体で31.4%減少するなど過疎化が進行している。市町村別には、合併前の旧紀和町においては8,564から1,623人へと約1/5以下に減少している。

一方では、旧鶉殿村においては、隣接する和歌山県新宮市からの転入などにより、人口が増加している。

図表 本地域の人口増加率 人口（人）増加率（%）

	昭和35年 (人)	平成17年 (人)	増減率 (%)	平成17年人口 を合併後に換算 した場合 (人)
熊野市	30,586	19,606	△35.9	21,229
旧紀和町	8,564	1,623	△81.0	
御浜町	12,965	9,902	△23.6	9,902
紀宝町	8,485	7,811	△7.9	12,648
旧鶉殿村	3,200	4,837	51.1	
計	63,800	43,779	△31.4	43,779

出所)「国勢調査」

(2) 人口構成

三重県と本地域の人口ピラミッドを比較すると、本地域の年齢構成は極端な高齢化を示していることがわかる。特に、20～24歳人口の全体人口に占める割合が三重県の5.2%に対して、本地域は2.6%で極端に低いことが、特徴の一つである。これは若者を中心とした人口流出によるものであり、本地域の人口の高齢化の大きな要因の一つとなっている。

(3) 若年者の流出

① 高校卒業後の転出

本地域内には、公立高校が2校あり、平成16年度においては、376名の

卒業生を出している。

卒業生のうち四年制大学、短期大学、専門学校等への進学者が265名（全体の70%）で、そのほとんどが地域外へ転出しており、とりわけ中京方面に転出する生徒が多い。

また、就職者は96名（全体の25%）で、そのうち26%が中京・関西方面の企業に就職しており、地元へは33名が残っている。地元就職者は、女子が23名であるのに対し、男子は10名となっている。主な就職先は、銀行、農協、スーパー、建設会社、官公庁などである。

② 雇用の場

本地域内での従業員の多い企業としては、紀州製紙があるが、100人以上の企業は4社である。

小規模な企業が大半であり、求人数が少なく、また計画的な採用もあまり行われていない状況である。

③ 転出の理由

若者が地域を出て行く理由としては、「都会生活へのあこがれ」、「地域に安定した大企業がない」「地域に魅力的な商業機能がない」「地域に遊ぶ所がない」などが主である。最近では地元での就職希望者も増えてきている。

地域を出て行った者の中にもUターン希望者がかなりあるが、地元の雇用面などでの受入態勢が不十分なため、戻ることができないという意見も多い。

(4) 高齢化の進行

本地域と全国の人口に占める老年人口割合を比較すると、昭和35年から平成15年まで本地域の高齢化率は全国平均を上回っており、さらに近年、本地域と全国の高齢化率の格差は広がりつつある。

一方、本地域で高齢人口割合の最も高い地域は、旧紀和町で、53.5%と県内で最も高い高齢化率となっており、地域全体でも、29.6%と、県平均を大きく上回っている。

3. 産業

(1) 就業構造

本地域の平成12年における労働者人口のうち就業者（労働力人口）は20,539人であり、総人口に対して52.6%であり、三重県平均の59.0%を大きく下回っている。

第一次産業就業者割合は14.0%で三重県平均の5.2%と比較しても8

ポイント以上高く、第一次産業のウエイトが高い地域である。

特に、当地域の中心産業は柑橘（みかん）栽培であり、明治時代の終わり頃からの歴史がある。

第二次産業をみると、本地域の就業者率は、全国と同様に、工場の生産体制の合理化、国内の労働賃金の高騰に伴う海外への生産拠点のシフト等により就業者率はほぼ横ばいの状態である。

また、第三次産業においては、本地域、全国とも、就業者率は増加傾向にある。

以上のことから、本地域の就業構造は、第三次産業の割合が高まっているが、依然として第一次産業就業者の割合は、高い水準にある。

(2) 第一次産業の現況

① 農業

本地域の農業の特徴としては、豊かな自然と恵まれた気候条件を生かして古くからかんきつ栽培が行われ、地域経済の主軸となっている。昭和49年度から平成3年度にかけて国営農地開発事業により造成された開墾畑には、中晩柑類等を中心とした一大生産団地が形成され、「年中みかんのとれるまち」として販売促進している一方、うめ栽培も導入され、かんきつ類に次ぐ地域特産品として期待されている。

また、稲作に関しては、小規模農家が多い中、一部でアイガモ米などの特産米への取組も行われている。畜産関係では、肉用牛、酪農等の大型経営農家が点在しているほか、野菜ではトマト、花きではコショウラン、スイートピーなどが栽培されている。地域特産品としては、山間部でたかな栽培が行われ、たかな漬として加工販売されているほか、雉、熊野地どり、味噌、みかんジュースなどが生産されている。

図表 農業算出額 (平成15～16年度 単位：千万円)

	果実(柑橘)	米	野菜・芋類	畜産	その他	計
熊野市	73	28	14	18	6	139
旧紀和町	1	4	2	40	2	49
御浜町	321	32	10	128	27	518
紀宝町	49	27	11	44	3	134
旧鵜殿村	1	1	1	—	0	3
計	445	92	38	230	38	843

出所) 第51次三重県農林水産統計年報

② 林業

本地域は、森林面積が総面積の82%を占め、豊かな山林資源を有しており、熊野杉に代表される良質な木材を算出し、林業を基幹産業の一つとして発達してきた。

図表 本地域の林野面積の状況 (平成15年度 単位ha)

	総面積	森林面積	森林率	森林面積の内訳		備考
				国有林	民有林	
熊野市	25,996	22,749	87.5	3,316	19,433	
旧紀和町	11,367	10,148	89.3		10,148	
御浜町	8,828	5,705	64.6	98	5,607	
紀宝町	7,678	6,042	78.7	46	5,996	
旧鵜殿村	288	32	11.1	3	29	
計	54,157	44,676	82.5	3,463	41,213	

出所) 平成15年度版 森林・林業統計書

② 水産業

本地域は、東側が熊野灘に面し、熊野市大泊から鵜殿港まで20数Kmにわたる砂利浜である「七里御浜」が続いており、漁港は熊野市北東部の海岸部と紀宝町（旧鵜殿村）にある。経営体数を見ると、三重県全体の2.6%にとどまっており、定置網、地引網が県全体の6%、海面養殖業においては0.4%である。

(3) 第二次産業の現況

① 事業所規模

本地域では、高速道路等の広域交通基盤の整備が十分でないことから大都市圏とのアクセスに問題があること、地価が高いことなどにより企業立地が進んでいない。

平成15年度の製造品出荷額等は、549億5千万円で三重県全体の0.7%を占めている。

また、本地域の総事業所数は110事業所で、三重県全体の2.1%、従業者数は1.1%である。

従業員100人以上の事業所数は、三重県全体の総事業所数325カ所に対して本地域は4カ所と少なく、全事業所の大半を小規模な零細企業が占め

る。そのため製造業全体の雇用力は小さく、地域内高校出身者、Uターン希望者などの十分な受け皿とならないため、若者を中心とした人口流出の要因の一つとなっている。

②進まない企業進出

本地域内は、平坦な土地が少ないこと、交通のアクセスが悪いこと、地価が高いこと等により、地域への企業進出は少ない。

工場適地の一つである御浜町の山地工業団地や紀宝町の井内工業団地においても、数社が操業をしているが、現在のところ、県内企業が中心となっている。

③主な地場産業の現状

ア) 食料品製造業

本地域の食料品製造業は、平成15年の工業統計調査によると、事業所数34、従業員数374人、製造品出荷額等477,358万円である。

また、事業所数は熊野市に集中している。

近年、本地域の食料品製造業は、原材料の高騰、零細な経営基盤、若者を中心とする人手不足などの要因により、とりまく環境は厳しいものとなっている。

イ) 木材・木製品製造業

本地域の木材・木製品製造業は、平成15年の工業統計調査によると、事業所数27、従業員数227人、製造品出荷額等364,967万円である。事業所の数は、熊野市が多い。

また、業種の内訳のほとんどは製材業であり、地元の木材を主な材料としているが、我が国の木材輸入が増えるに従い、内地材相場は、外材の動向に大きく左右されてきている。

ウ) 窯業・土石製品製造業

本地域の窯業・土石製品製造業は、那智黒石の加工が主な事業内容であり、製品としては観光客向けの置物、基石、硯石等がある。

(4) 観光産業の現況

本地域の観光入込客の動向をみると、市町村別には、熊野市への入込客が108万人と全体の59%を占め、次いで旧紀和町が32万人となっている。

また、入込客の地域別では近畿、中部、県内からの入込客がそれぞれ約3

割づつとなっている。

旅行の形態別では家族を伴う入込客が約半分を占めている。また、アンケート調査によると、入込客数の約7割が観光を目的としており、自家用車の利用（71%）が最も多くなっている。

宿泊機能としては、本地域全体の収容者数は2,812人である。旅館・ホテルが一施設当たり35人、民宿が19人と収容規模が小さい。

4. 地域の整備

(1) 生活基盤施設等

① 道路

本地域の主要道路としては、紀伊半島を周遊している国道42号を中心とし、奈良県を通り大阪都市圏と本地域を結ぶ国道169号、尾鷲市から熊野市までの沿岸部を通り、県境の和歌山県新宮市から山間部をとおり田辺市へ通じる国道311号等がある。

本地域の道路改良率は62.4%と県平均の70.1%と比較して低くなっている。

② 港湾

本地域には、鵜殿港、二木島港、木本港があり、鵜殿港については製紙工場の原材料等の輸送に大きな役割を果たしている。

③ その他

ア) 住宅

本地域における住宅整備の現状は、持ち家率が81.9%であり、三重県の平均75.3%を上回っており、持家における延べ床面積も広い。

本地域においては、平地が乏しく、住宅適地が少ないことから、地価が高い状況にある。

イ) 下水道等

本地域においても、生活排水等による公共水域の水質が改善されておらず、環境衛生の向上、リゾート地域としての環境整備のために、も公共下水道、農業集落排水、漁業集落排水、合併処理浄化槽など、地域にあった整備を行っていく必要がある。

現在までのところ、本地域の公共下水道普及率は6.7%である。下水道整備がされているのは、人口が密集した御浜町阿田和地区のみである。

ウ) 教育・文化施設

本地域の文化施設においては、平成16年3月末時点で文化会館4カ所、

公共図書館2カ所となっている。

また、体育施設は平成15年6月1日現在で体育館5ヶ所、野球場3カ所、運動広場6カ所となっている。

(2) 商業圏

熊野市駅周辺にややまとまった商業集積があり、市街地の中心となっている。

また、本地域は県境に和歌山県新宮市があり、紀宝町については、県境の新宮市の商圈での消費が多い。

(3) 福祉・医療

① 福祉

本地域には御浜町に養護老人ホーム、熊野市、紀宝町に特別養護老人ホームがあり、老人福祉センターも地域内に数カ所設置されている。本地域の高齢者比率は県平均を大きく上回っており、今後高齢者の健康づくりや生きがいづくりが一層重要となってくる。

② 医療

本地域には、組合立紀南病院があり、この病院を中心として、地域内の一般診療所、歯科診療所と連携した医療体制がとられている。

しかし、山間へき地地域においては、無医地区や医師が不在のため、休止している診療所などもあり、医師の確保や保健医療の確保が急がれている。

(4) 地域イベント等

本地域には、「熊野の花火」、「お縄掛け神事（花の窟神社）」など多くのイベントがある。特に300余年の歴史がある「熊野の花火」は毎年、10万人以上の観客を集める紀州路最大の夏の風物詩として地域間交流の場となっている。

これらのイベントは、地域づくりを推進する若者等の育成の役割を果たしており、地域づくり、まちづくりを住民自らが考える場ともなっている。

また、ボランティアによる地域イベントが数多く行われている。